

| | |
|-------------|---|
| Title | 梁初の文學集團 |
| Author(s) | 森野, 繁夫 |
| Citation | 中國文學報 (1966), 21: 83-108 |
| Issue Date | 1966-10 |
| URL | http://dx.doi.org/10.14989/177269 |
| Right | |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| Textversion | publisher |

梁初の文學集團

森 野 繁 夫
廣 島 大 學

六朝における文學の集團化と遊戲化とは、どちらが因であり果であるのか明らかでないが、その結果、當時の文人は集團の中の一人としてしかとらえられなくなつた。集團をはなれては文學も文人も成り立たない、というのが實情であつたようである。

このような状態にある齊梁の文學を見てゆくには、まず當時の文學集團の整理が必要である。その手ははじめとして、ここでは梁初の文學集團について整理してみた。

梁初の主な文學集團には、高祖および昭明太子を中心とする中央集團、高祖の子の晉安王綱、湘東王繹、弟の安成王秀、南平王偉ら諸王を中心とする地方集團があり、梁初の文學はこれらの集團を舞臺に展開される。一方、これら

梁初の文學集團（森野）

の所謂公的集團に對して私的な集團ともいえる、任昉を中心とする蘭臺聚、裴子野らの古體派グループ、さらには劉氏、到氏、蕭氏などに見られる親族文人の集りなどがあるが、そのほとんどは高祖および諸王の集團に含まれた存在であつた。高祖や諸王の文學愛好により、皇族中心の度合は、前代齊に比べて更に強くなつたようである。以下、おのおのの集團について、所屬する文人を中心に、その動きを見てゆくことにする。

一 高祖を中心とする中央文壇

高祖（宋・大明八年⁴⁶⁴—太清三年⁵⁴⁹）を中心とする梁初文壇の様子は、梁書文學傳序および劉苞傳によつて、その大略をうかがうことができる。すなわち文學傳序には、

高祖は聰明にして文思あり、區宇に光宅す。あまね旁く儒雅を求め、異人を招採す。文章の盛んなる、煥として俱に集まる。御幸ある毎に輒ち羣臣に命じて詩を賦せしめ、其の文の善き者には、賜うに金帛を以つてす。闕庭に詣りて賦頌を獻ずる者、或は引見さる。其の位に在る者には、

則ち沈約、江淹、任昉あり、並びに文采を以つて當時に妙絶す。彭城の到沆、吳興の丘遲、東海の王僧孺、吳郡の張率らの、或は入りて文德に直し、壽光に通謙するが如きに至りては、皆 後來の選なり。

また劉苞傳には、

高祖 位に即き、後進文學の士を引きてより、(劉)苞 および從兄の孝綽、從弟の孺、同郡の到溉、溉の弟洽、從弟の沆、吳郡の陸倕、張率は、並びに文藻を以つて知られ、謙坐に預かること多し。仕進に前後ありと雖も、其の賞賜は殊ならず。

とあるように、梁初の文壇は、前代の齊に活躍した既成文人と、梁になつて新たに高祖に召された後進の文人とによつて構成されていた。

この中、まず前代からの文人について見てみよう。その生卒年は、沈約が宋の元嘉一八年 441—天監一二年 513、江淹が宋の元嘉二二年 444—天監四年 505、任昉が宋の大明四年 460—天監七年 508であるから、天監元年には沈約六二歳、江淹は五九歳、任昉は四二歳である。したがつて後進の文人達

の間では、特に沈約、江淹は長老的な存在であつたと思われる。これら前代からの既成文人が、後進の文人にまじつてどのような活動をしたか、よくはわからないが、それほど活潑な創作活動はしなかつたものである。というのは、當時、江淹と任昉について、「才が盡きた」ということが言われているからである。まず江淹については南史本傳に淹 少くして文章を以つて顯われたるも、晚節 才思やや退く。宣城の太守たりし時、罷めて歸り、始め禪靈寺渚に泊るに、夜 一人を夢む。自ずから張景陽と稱し、謂いて曰く「前に一匹の錦を以つて相い寄す。今還さるべし。」淹は懷中を探りて數尺を得、之に與うるに、此の人 大いにいかりて曰く「那得ぞ割截ちて都べて盡すぞ。」丘遲を顧り見て謂いて曰く「此の數尺を餘すも、既に用うる所なし。以つて君に遺る。」これより淹の文章 蹟く。

また任昉については同じく南史本傳に

昉 既に文采を以つて知られ、時人は「任筆沈詩」という。昉は聞きて甚だ以つて病と爲す。晚節、轉た好んで

詩を著わし、以つて沈を傾けんと欲するも、事を用いること過た多く、辭を屬るに流便なるを得ず。都下の士子は之を慕いて、轉た穿鑿を爲す。是に於て「才盡く」の談あり。

とある。

「才盡く」とは、彼等の創作能力が枯渇して、質量ともに以前ほどでなくなつたことを意味するものであろうか。その原因が果して「才盡」にあつたかどうかはわからないが、沈約を含めて當時の長老たちが、目立つような創作活動をしなかつたことは事實のようである。梁書や南史には、沈約や任昉らが高祖の坐に預つて後進の文人達と詩を賦す場面がしばしば記されているが、高祖の賞賛にあづかるのは何時も後進の士であることからみても、前代からの文人は既に文壇における現役ではなく、後進の指導と育成を、その主な役目としていたものと思われる。

ただその中にあつて任昉だけは、四十數歳という年齢のせいもあつてか、後進をその周圍に集めて彼等の面倒を見ている。梁書到溉傳にはその様子を次のように述べている。

昉の（天監五年、義興太守より）還りて御史中丞となるや、後進みな之を宗とす。時に彭城の劉孝綽、劉苞、劉孺、吳郡の陸倕、張率、陳郡の殷芸、沛國の劉顯および到溉、到洽あり。車軌日に至り、號して蘭臺の聚りと曰う。

この聚りはまた「龍門の遊び」とも呼ばれていたようで、南史陸倕傳には、

昉の中丞と爲るに及び、簪裾のひと輻湊るも、其の謙に預かる者は、殷芸、到溉、劉苞、劉孺、劉孝綽および陸倕のみ。號して龍門の遊びと曰い、貴公の子孫と雖も、預かるを得ざるなり。

とある。この任昉の坐に集つた顔ぶれは、高祖に召された後進文人のほとんど全てであるが、それは、これらの人々が任昉の推薦によつて其の地位を得、さらにまた將來の榮達を彼に託していたからと思われる。梁書裴子野傳には、樂安の任昉、盛名あり、後進の慕う所となる。其の門に遊ぶ者は、昉必ず相い薦達す。とあり、確かにそれは「龍門の遊び」であつたようである。

なおこのグループには、たとえ貴公の子孫であつても参加することはできなかったというが、氣前がよくて何時も貧乏だつた任昉にとつて、その貴族然とした態度が氣にくわなかつたのか、それとも文才のある者だけを選んだものなのか、よくわからない。しかし梁書本傳に「昉 士大夫の間に立つや、汲引する所多し。己に善くする者あらば、則ち其の聲名を厚くす。」と記すように、自分を頼りにして忠勤を勵む人士には、親身になつてその面倒をみてやつたようである。その結果、多くの士友に推戴されることになつたわけで、いつてみれば、親分肌の人物であつたといえよう。

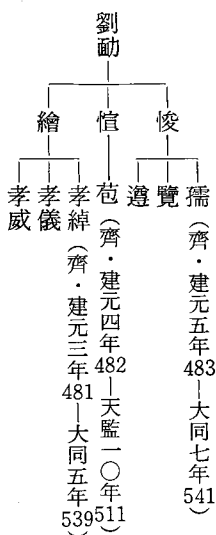
ところで後進の文人が、何故、一代の辭宗とうたわれる沈約の門に集まらずに任昉を慕つたのか、いささか疑問であるが、梁書、南史沈約傳の「高才を自負し、榮利に昧し。……事を用いること十餘年、未だかつて薦達する所あらず。」という記述を見れば、その疑問も解けてくるようである。彼はすぐれた文人や作品に對しては、惜しみなく賞賛の言葉を發するが、それに目をかけて推薦するということこ

とは、あまりなかつたようである。自ずから持することの高い沈約には、あれこれ氣をつかうことの多い他人の世話などはできなかったであろうし、またそのような才覺も持ち合わせていなかったようである。その點が任昉と違ふところで、彼を中心に文人の集團ができなかった原因は、そのあたりにあると考えられる。

以上要するに、梁初の文壇においては、前代からの既成文人は、すでに現役ではなく、創作面において、それほど活躍したとは思われない。彼等の果した役割は、結果的に見て、後進文人の育成にあつたものと言えよう。ただ彼等の下す評價はすべて、前代齊における評價基準に本づくものであり、したがつて、その影響下にあつた後進文人達の文學も、齊代の文學の延長とならざるを得なかつたようである。

次に、沈約、江淹、任昉らの影響の下に擡頭してきた後進文學の士について見てみよう。梁の初に、高祖が廣く文學の士を求めたことは、既にあげた梁書文學傳序に述べて

あるとおりであるが、さらに梁書劉峻傳にも「高祖 文學の士を招く。高才ある者は多く引進され、擢くに次を以つてせず。」袁峻傳にも「高祖はもとより辭賦を好む。時に文を南闕に獻ずる者相い望む。其の藻麗にして觀るべきものは、或は賞擢さる。」のように云つてゐる。もちろん其の間には、任昉をはじめとする既成文人の力が、直接間接に働いてゐるわけであるが、こうして擢引された後進の中の主なものが、文學傳序や劉苞傳にあげる劉苞、劉孝綽、劉勰、到溉、到沆、陸倕、張率、丘遲、王僧孺といった人々である。これら後進は、その文壇に占める位置、その他いろいろの面からみて、三劉、三到、陸倕と張率、王僧孺と丘遲、という四つのグループに分けられるようである。以下、天監年間における彼等の足どりを順を追つて尋ねてみよう。



緯らとともに、しばしば高祖の宴坐に預り、詔を受けて詩を賦し文名を馳せている。しかし三人の中では最も早く、天監一〇年511に卒した。

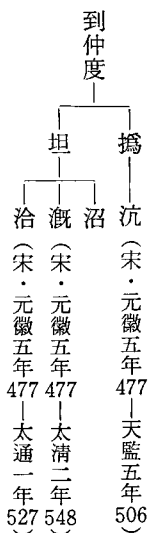
劉孝綽は幼いころから神童のほまれ高く、一四歳で父繪の代草をしたほどで、評判を聞いた沈約、任昉、范雲らが車を連ねて會いに來たという。天監の初に著作佐郎となり、太子舍人、尙書水部郎と累遷、沈約、任昉らと席を同じくして詩を賦し、高祖の賞讃をうけて知靑北徐南徐事に任命され、六年には安成王記室として王府に隨い、還つて太子洗馬に補せられ、尙書金部侍郎に遷り、復た太子洗馬となつて東宮管記を掌つた。その後、上虞令として出、還つて「天下の清官」といわれる祕書丞に除せられている。これが孝綽の天監一〇年頃までの經歷である。

以上の三人について、梁書劉孺傳には「孺は少くして從兄苞、孝綽と名を等しくす。苞は早く卒し、孝綽は數しば坐して免黜され、位は並びに高からず。ただ孺のみ貴顯となる。」といっているが、文章においては孝綽が最もすぐれていたようで、若い頃、齊の中書郎の王融に「天下の文

章、若し我無くんば、當に阿士（孝綽の小子）に歸すべし。」と賞異されているほどである。後には「孝綽の辭藻は後進の宗とする所と爲り、世其の文を重んず。一篇を作るごとに、朝に成れば暮には遍^まねし。好事者咸^{みな}諷誦し傳寫し、絕域にまで流聞す。」（梁書本傳）「亭苑の柱壁、之を題ざざるは莫し。」（南史本傳）と記されるまでになるが、しかし其の才を誇つて、しばしば傲慢な態度をとつたため、人に怨まれることが多かつた。その結果、前後五回も免職になつているが、中でもかつては親友だつた到洽の彈劾による失脚が最大のものである。

2 到溉 到洽 到沆

三人の關係と生卒年は次のようである。



溉と治とは兄弟、沆は溉の從弟という間柄で、天監の初には三人とも二五、六歳で、三劉より少し年上である。三人

とも既に齊末には名を知られていたようであるが、とりわけ概、洽の兄弟が世に出るについては、両親の力が大いに與つてゐる。すなわち南史到溉傳には、兄弟が世に出るまでのいきさつを「父（坦）は概、洽の二人を提携たすきえて廣く聲價を爲し、生母の魏は本と寒家なるも、越中の資を悉つくして、二兒の爲に（任）昉に推奉す。」のように記している。こうして概、洽の兄弟は任昉に特に目をかけられ、天監二年には義興の太守となつた任昉に連れられて郡に行き、そこで山澤の遊びなどをしてゐる。

さて此の三人は、劉氏の三人と同様に、天監の初に高祖に召されたわけであるが、まず到溉は天監の初に尙書殿中郎となり、ついで建安内史として赴任、還つて太子中舍人となり、さらに通事舍人、中書郎となつて、吏部太子中庶子を兼ねた。十三年には會稽太守となつた湘東王繹に輕車長史、行府郡事として隨行する。その出發に際して高祖は王に「到溉は、直に汝が行事たるのみに非ず。汝が師たるに足れり。進止あるときは、毎に須つねべからく詢たずね訪もとうべし。」と言いきかせており、高祖の信頼は厚かつたようである。

弟の洽は、天監の初に太子舍人に擢用されたが、それについて次のような話が傳えられている。

天監の初、洽、概は俱に擢用を蒙り、洽は尤も知賞され、從弟の沆も亦た相い與に名を齊しくす。高祖は待詔の丘遲に問いて曰く「到洽は沆、概に何如ん。」遲は對えて曰く「正清なること沆に過ぎ、文章は概におとらず。加うるに、清言を以つてすれば、殆んど將に及び難からん。」即ち詔して太子舍人と爲す。（梁書・南史本傳）

これによると、先ず概が用いられ、ついで洽、沆が擢用されたもようである。二年には司徒主簿に選つて待詔省づめとなり、五年に尙書殿中郎となつた。當時この職は「職に在りて清能、或は人才高妙なる者」の就くものとされてゐたが、概が天監の初に、沆が三年に、ついで洽が五年に此の職に就いたわけで、梁書、南史の到沆傳には「三年、沆を以つて殿中曹侍郎となす。此の曹は文才を以つて選ばれ、沆の從父兄概、洽は並びに才名あり、時に相い代りて之と爲り、當世に榮とさる。」とある。七年には太子中庶人に選つて、庶子の陸倕とともに東宮管記を掌り、ついで九年

に國子博士に遷り、十二年には臨川内史となつてゐる。

到沅は元年に征虜主簿となつたが、十一月に東宮が建てられると太子洗馬に拔擢された。ついで太子洗馬のまま東宮書記および散騎省の優策文を管つかさどるようになり、三年には殿中曹侍郎となり、四年に太子中舍人に遷つた。本傳には此の頃「任昉、范雲と友として善し」と記してゐる。其の年に丹陽尹丞となつたが、疾のために北中郎諮議參軍に遷り、翌天監五年506、三十歳の若さで世を去つた。

到溉、洽の兄弟はその後ながく梁の文壇に主要な位置を占め、時人は陸機、陸雲に比し、世祖（湘東王繹）は概に「魏の世に雙丁を重んじ、晉の朝に二陸と稱す。何如んぞ今の兩到の、復た凌寒の竹に似たるに。」という詩を贈つてゐる。兄弟の仲の良さと、その文才についていつたものであるうか。

3 陸倕 張率

三劉、三到という若手に比べて、この二人は少し年をとつており、天監元年には陸倕（宋・泰始六年470—普通七年526）は三三歳、張率（宋・元徽三年475—大通元年527）は二八歳であ

る。とりわけ陸倕については「十七にして本州の秀才に擧げらる。刺史の竟陵王子良の、西邸を開きて英俊を延まねくや、倕もこれに預る。」（梁書・南史本傳）とあるから、沈約などからみれば後進かもしれないが、梁初の文壇においては、すでに中堅クラスであつた。後に太子となつた蕭綱が、弟の湘東王繹に與えた書によると、陸倕の筆を任昉のそれと並べて「文章の冠冕、述作の楷模」とし、張率の賦を周捨の辯とともに「亦た佳手に成り、復び遇うべきこと難き」ものとしており、陸倕と張率の文章は、當時、高く評價されていたようである。

さて陸、張の二人は、ともに吳郡の出身で、少い頃から仲が良かった。齊の末に二人で沈約を訪ねたことがあつたが、沈約は、ちやうどそこに居合わせた任昉に「此の二子は後進の才秀、みな南金なり。卿 與に交りを定むべし。」といつて二人を紹介したので、以後、陸倕と張率は、任昉に親しくされるようになったという。（梁書・南史本傳）

張率は天監の初に鄱陽王友となり、司徒謝朓の掾に選つて文德待詔省につめ、乙部の書を抄したり、古婦人の事を

撰したりしていた。その頃、「待詔の賦」を爲^つて奏上し、「相如は工なれども敏ならず、枚皐は速なれども工ならず。卿は二子を金馬に兼ねと謂うべし。」と高祖に稱賞されるなど、そのおぼえはめでたく、天下の清官といわれる祕書丞となり、集書省の詔策を掌つた。四年に父の死によつて職を去り、八年からは晉安王府に配屬され、王に隨つて出入すること十年にも及んだ。

陸倕は天監の初には右軍安成王の外兵參軍となり、ついで主簿に遷つた。その頃「知己に感ずるの賦」を爲つて任昉に贈り、任昉も同題の賦を爲つて答えている。六年ごろ、太子中舍人に遷つて東宮書記を掌り、七年には太子庶子國子博士となり、ついで太子中舍人となつて、到洽と東宮管記を對掌した。その後、母の死によつて職を去り、服が闕ると中書侍郎、給事黃門侍郎、揚州別駕從事史と累遷、疾のため解任を願つて許され、鴻臚卿に遷り、入つて吏部郎、參選事となつた。ついで雲麾晉安王長史、尋陽太守行江州府州事として赴任したのは天監十四年のことである。

4 丘遲 王僧孺

梁初の文學集團（森野）

この二人は、梁書文學傳序には、張率や到沆とともに「後來の選」として擧げられているが、劉苞傳にいう「後進文學の士」および任昉をとりまく若手グループ「蘭臺聚」の中には、その名は見えない。天監元年には既に丘遲（宋・大明八年464—天監七年508）は三九歳、王僧孺（宋・大明九年465—普通三年522）は四十歳であり、文學傳序の「後來の選」とは、沈約や江淹に對しての表現で、當時すでに文人としての名は世に通つていた。王僧孺は齊の竟陵王子良の西邸に遊び、そこで任昉と文學を通じて友となつており、丘遲もすでに三到のところで述べたように、高祖の問いに應じて三到の評價を下しているほどの人である。そのようなわけで二人とも後進文學の士とは同日に論ずることはできない。

丘遲は、高祖が廟府を開いた時に驃騎主簿として甚だ禮遇され、即位すると同時に散騎侍郎となり、すぐに中書侍郎、領吳興邑中正に遷り、文德省につめた。三年に永嘉太守となり、四年には臨川王宏の北伐に諮議參軍、領記室として従い、還つて中書侍郎、ついで司徒從事中郎となり、七年508に官に卒した。時に年四五。この年に任昉も四九歳

で亡くなつてゐる。丘遲の詩風については、詩品中品に「點綴 あてずか 映媚にして、落つる花の 草に依るに似たり。」と評している。また當時、江淹の才の残りをもらつた、という話（南史・江淹傳）のあるところを見ると、江淹の體に似たところがあつたのかもしれない。

王僧孺は天監の初に臨川王宏の後軍記室參軍となり、文德省につめた。したがつて此の頃は何時も丘遲と顔を合わせていたことになる。ついで南海太守として赴任、徴し還されて中書郎 領著作となり、復び文德省づめとなつて中表簿および起居注を撰した。その後、尙書左丞 領著作に遷り、すぐに遊擊將軍に除せられ御史中丞を兼ねたが、公事によつて降等されて雲騎將軍 兼御史中丞となり、しばらくして御史中丞となつた。ついで少府卿に遷り、出でて監吳郡となり、遷ると尙書吏部郎に除せられて大選に參じ、南康王長史 蘭陵太守 行府州國事として赴任したのは天監十年のことである。なお彼の詩について梁書本傳には「其の文は麗逸にして、多く新事の、人の未だ見ざる所の者を用う。世 其の富博なるを重んず。」というが、同じ

く本傳に「墳籍を好み、書を聚むること萬餘卷に至る。率ね異本多し。」とあるところを見ると、彼が文中に用いた「新事」の種は、この「異本」からとり出されたものであらう。この點については「動もすれば事を用う」（詩品）と評された任昉に「墳籍見ざる所無し。家は貧なりと雖も、書を聚むること萬餘卷に至る。率ね異本多し。」（本傳）という記述があるのと同じである。用事、それも異事の使用は、前代齊の詩風を引き繼いだ梁の詩の、主要な特色の一つのようである。

以上が後進文學の士の主なものであるが、この他にもまだ多くの後進がひしめいてゐる。ここではその中の數人について觸れるにとどめておく。

謝覽（宋・昇明三年479？—天監十四年515？）は、齊末にすでに「此の生 蘭を竟體に芳わすかと覺ゆ。想うに（祖父の）謝莊も政だ當に此の如かるべし。」と高祖を歎息させたほどの人物である。天監元年には二二、三歳、中書侍郎となつて吏部の事を掌つた。その頃のこと、高祖の坐に侍

つていて敕をうけ、侍中の王暕と詩を爲つて贈答したが、その文が甚だ巧みであつたので、高祖は重ねて爲らせ、またまた氣に入つてしまい、「雙文 既に後進、二少 實に名家、豈にこれ止だに棟隆なるのみならん、信に乃ち俱に國の華なり。」という詩を詠んだという。しかし酒が好きで、散騎常侍の蕭琛と宴席で口論したため降等されたこともあつた。その後、東宮管記を掌り、新安太守に遷つた。

そのころの部下に次に述べる周興嗣がいた。次いで新安郡における不手際によつて司徒諮議參軍仁威長史に左遷されたが、すぐに吏部尙書に返り咲き、十二年に吳興太守として赴任した。

周興嗣（？―普通二年521）は、高祖が即位した時に奉つた「休平の賦」によつて認められ、安成王國侍郎として華林省につとめるようになった。四年、河南國から舞馬が獻上され、高祖の命によつて待詔の到治、張率と俱に賦を爲つたが、高祖は興嗣の作を巧みとして員外散騎侍郎に拔擢し、文德壽光省づめに進めた。時に高祖は、舊宅を光宅寺とし、その寺碑を興嗣と陸倕にそれぞれ爲らせたが、結局、興嗣

の作を採用している。張率、陸倕、到治と文章を競つて勝るとも劣らなかつたところを見ると、相當の文才の持主であつたようである。以後、高祖は銅表銘、柵塘碣、北伐檄などの文章を全て彼につくらせている。九年に新安郡丞に除せられ謝覽の下で働き、還つてまた員外散騎侍郎佐撰國史となり、十二年には給事中に遷り、撰史は故のままたいふ状態であつた。

袁峻は梁初における「高祖 雅より辭賦を好み、時に文を南闕に獻ずる者、相い望む。其の藻麗にして觀るべきものは、或は賞擢さる。」という状態に乘じ、楊雄の官箴に擬した文章を奉つて認められ、員外散騎侍郎に除せられて文德學士省につめるようになった。後に敕命により陸倕とそれぞれ新闕銘を製したこともある。

劉峻（宋・大明六年462―普通二年521）は、すこし前の王敬胤とともに世説の注者として知られているが、高祖の坐において、その「性に率まよせて動き、衆に隨つて浮沈する能はざる」性格のゆえに、高祖にひどく嫌われた人である。ある事が原因で以後目通りかなわぬことになつた劉峻は、安

成王秀の戸曹參軍として荊州に隨い、そこで王命によつて「類苑」の撰作にとりかかったが、疾のために完成できぬままに職を去つた。後に「類苑」が出来上ると、高祖はさつそく諸學士に命じて「華林編略」という同じような書を編纂させて、「類苑」を採用することをしなかつたという。よほど峻が氣にくわなかつたらしい。峻の「辨命論」は、このような状態において、其の懷いを託したものだと言南史本傳には記す。

梁初の中央文壇は、以上述べたような状態であるが、當時、中央に進出し更に高祖の坐に侍るようになるには、どうしても沈約、江淹、任昉といった名士の推薦を得ることが必要であつたようである。資を悉して二兒（到溉、洽）のために推奉した魏氏の行爲は決して特例ではなく、高祖の坐に侍るようになった人すべてが、そのようであつたものと思われる。中には沈約に推薦を依頼して斷われ、結局地方で一生を卒えた鍾嶸のような例もあつた。さてこうして名士の推舉によつて高祖にお目通りが適うようになると、

今度は高祖の好みに合うような巧みな詩文を作つて、おほめに與らねばならない。同坐の人々を壓えて高祖の氣に入れば、出世の道が更にひらけることになるわけで、高祖の氣に入るような文章を作つたため、即坐に官職を進められた人々の例は數えきれぬほどある。ところが逆に、好みに合わねば忘れられた存在となり、坐に召されることもなくなつてしまう。またその態度が高祖の意にそわなければ、以後目通りかなわぬことになつて、集團から脱落してゆくことになる。既に述べた劉峻、後に觸れる何遜、吳均といった人々が、そのよい例である。したがつて中央文壇にひしめく後進の文人たちは、何とかして名士に、さらには高祖に其の文章を認められようと懸命であつた。文章こそ立身の道であつたのである。そのようなわけであるから、作られる詩文はすべて高祖ごのみの、表現の凝つた綺麗なものになつてくるのも致し方なかつた。三劉、三到、陸倕、張率、丘遲、王僧孺らの文章は、すべてそのようなものである。もし新變の文章でも作れば、すこし後のことになるが、徐摛のように、高祖に呼びつけられ誚責されることに

もなる。所詮、中央文壇では、個性豊かな文學は育たず、すべて御用文學となつてしまひ、眞に個性のある文學は、集團にしろ個人にしろ、中央文壇の影響の少い、地方に芽生えてくる。その芽が大きく育つてはじめて、梁の文學といえるものができ上るので、それまでの梁の文學は、齊の文學の延長にしかすぎなかつた。その梁の文學の最も大きな芽生えは晉安王綱（後の簡文帝）の集團で、荊州、江州、南徐州、雍州と藩府を移しながら、中央文壇に批判的な徐摘、鍾嶸らを中心に、新しい文學のための基礎づくりがなされていた。ところで一方、これとはちがつた意味で個性的な文人、すなわち中央の文風になじめずに、地方で孤高を保つてゐる文人もある。それは「清新の氣」ありと稱される何遜、吳均、五言詩の名手として何遜と名を齊しくした王國侍郎の虞騫、詩品に「奇句清拔」と評される晉安王侍郎の虞羲、同じく詩品に「能くおのずから迥出^{けいしゅつ}す」といわれる建陽令の江洪といった人々である。これら「清新」「清拔」という評語を與えられるような詩は、簡文帝を含めて、齊梁の文學とは相い容れない性格のものであつたよ

梁初の文學集團（森野）

うである。

二 昭明太子の文學集團

前代からの既成文人と、後進文學の士によつて織りなされた梁初の中央文壇も、天監四年に江淹が、七年に任昉、十二年に沈約が世を去ると、後進のものとなる。その中心にクローズ・アップされてくるのは、高祖の長男として齊の中興元年⁵⁰¹に生まれた蕭統つまり昭明太子である。以後、中大通三年に三一歳で薨^{くわう}するまで、その文學集團は「晉宋以來、比^{くら}ぶるものなし」といわれるほどの盛況をみせる。梁書、南史の王筠傳には、

昭明太子は文學の士を愛し、常に筠および劉孝綽、陸倕、到洽、殷鈞（芸）らと玄圃に遊宴す。太子 獨り筠の袖を執り、孝綽の肩を撫して、言いて曰く「いわれる左に浮丘の袖を把り、右に洪崖の肩を拍つ。」其の重んぜらるること此の如し。

と、その坐の様子を述べてゐる。王筠（齊・建元三年⁴⁸¹—太清三年⁵⁴⁹）は、尙書令沈約に其の文才を高く評價され、そ

の「晩來の名家、ただ王筠の獨歩するを見るのみ」という推薦によつて中央に出て來た人で、六年頃に尙書殿中郎となり、ついで太子洗馬、太子中舍人と累遷し、いずれも東宮管記を掌つてゐる。當時、つまり天監七、八年の頃には、到洽は太子中舍人として、太子庶子の陸倕と東宮管記を對掌し、劉孝綽もまたその頃、太子洗馬として東宮管記を掌つてゐる。殷芸と殷鈞については、梁書は芸、南史は鈞とするが、當時、芸は通直散騎侍郎 兼中書通事舍人、鈞は太子家令として東宮書記を掌つており、どちらかといへば、鈞とする南史の方が正しいのではないかと思う。その頃、太子はまだ八、九歳であつたが、すでに壽安殿において孝經を講じ（八年九月）、盡く大義に通じていたといわれる。高祖は、どの息子にたいしても、信頼のおける文人を選んで側につけてゐるが、特に太子の統には當代一流の文人達を配してゐたようである。高祖の太子に對する心遣いは、梁書王錫傳の次のような記事にもうかがえる。

時に昭明は尙お幼く、未だ臣僚と相い接せず。高祖は太子洗馬王錫、祕書郎張纘、親表の英華、朝中の髦俊に、

師友を以つて之に事う可し、と敕す。

高祖の配慮による、すばらしい文學環境の中で、太子は文學集團の主として生長してゆくのである。

ところで王筠、劉孝綽、到洽、陸倕、殷鈞らは、その後の幾度かの轉任を経て、天監の末頃に再び太子の坐に顔をそろえる。梁書・南史劉孝綽傳には當時の様子を、

（劉孝綽は）太府卿 太子僕に遷り、復た東宮管記を掌る。時に昭明太子は士を好み文を愛し、孝綽は殷鈞（芸）、陸倕、王筠、到洽らと共に賓禮さる。

と記す。當時、陸倕は太子中庶子、王筠は太子家令、到洽は太子中庶子、殷鈞（南史）は東宮學士から更に中庶子國子博士に遷り、殷芸（梁書）は國子博士 太子侍讀であつた。またこの頃、天監の初に高祖の坐に侍して文名を馳せた張率が、晉安王府における十年間の勤めを了えて還り、太子の坐に侍つてゐる。張率傳によれば「太子家令に遷り、中庶子陸倕、僕射劉孝綽と東宮管記を對掌す。」という。

ところでこれらの人々の中、太子に最も愛接されたのは劉孝綽で、太子が樂賢堂を建てた時、畫工に先ず畫かせた

のは劉孝綽の姿であつたという。また太子の文章が「繁富」なため、羣才はすべて其の撰録を願ひ出たが、太子は孝綽だけに撰集を許している。

時に太子は二十歳くらい、梁書・南史の本傳には

才學の士を引納し、賞愛して倦むこと無し。恒に自ずから篇籍を討論し、或は學士と古今を商榷し、間には則ち繼ぐに文章著述を以つてするを、率ね以つて常と爲す。時に東宮には三萬卷に幾き書あり、名才並び集まり、文學の盛んなること、晉宋以來、未だこれ有らざるなり。とあるのは、この頃から中大通三年に三一歳で薨するまでの、太子とその集團の日常の様子であらう。本傳にはさらに、玄圃の亭館における清遊の一こまを次のように述べている。

嘗つて舟を後池に泛ぶるに、番禺侯軌は盛んに「此の中に宜しく女樂を奏すべし」と稱す。太子は答えず、左思の招隱詩を詠じて曰く「何ぞ必ずしも絲と竹とのみならん。山水に清音あり。」侯は慙して止む。

山水を愛し、聲樂を畜えなかつたといわれる太子の眞面目

梁初の文學集團（森野）

な性格がよく表われている。

太子の文學集團に参加した人々には、以上述べた王筠、劉孝綽、陸倕、張率、到洽、殷鈞（芸）のほかに、到溉、劉勰、謝舉、劉勰、庾於陵らがいる。

到溉は天監十一、二年ごろに太子中舍人になっており、劉勰も天監二、三年から十二、三年にかけて、引き續いてではないが太子舍人、太子洗馬、太子中庶人、太子家令、太子中庶人として太子の側に事えている。庾於陵は肩吾の兄であるが、七、八年ごろに太子洗馬となつてゐる。

劉勰（宋・泰始46571初—普通52026初）は、天監十年頃かと思われるが、仁威南康王記室として東宮通事舍人を兼ね、ついで歩兵校尉として復た東宮通事舍人を兼ねており、梁書・南史本傳には「昭明太子は文學を好み、深く之を愛接す」と記されている。時に「文心雕龍」は完成していたから、太子との間にはそれについての議論も爲されたであらうし、それが太子の文學觀に影響を與えたことはまちがいあるまい。後に「晉安王集團」でふれる、晉安王と鍾嶸との關係にも似て興味深いものがある。

謝舉（？—太清二年⁵⁴⁹）は高祖集團のところで述べた謝覽の弟である。十四歳の時、沈約に五言詩を贈つて賞讃され、世の人々は「王に養（筠の小字）炬（泰の小字）あり、謝に覽、舉あり」と評判したという。また兄の覽といつしよに或る年の元會に參列した時には、江淹が一見して「いわゆる二龍を長塗に馭するなり」と感嘆の言葉を發している。天監の初に太子舍人、太子庶子となり、五年には太子家令として東宮管記を掌り、ついで太子中庶子となつて管記を掌り、深く太子に賞接された。

このように東宮における太子を中心とする文學集團は、それまでになかったほどの盛況をみせるのであるが、同時に高祖の壽光殿、華林園などにおける文學活動も盛んに行われているわけである。この二つの集團の間では、所屬する文人も活動の場も一應區別されているが、折あるごとに往き來しているようであるから、中央文壇として一つに扱つてもよからう。

高祖が文學を愛好し、文人を招引すれば、諸王たちも其

の影響を受けざるを得ない。昭明太子、晉安王綱、湘東王繹の三人は、それぞれ文章の才に恵まれてもいたが、さらに父高祖の眼鏡に適つた文人を側につけられ、いやでも文學を愛し、文人を手許に招く習慣がついてしまふ。ただ高祖の膝下にいる太子と、地方に王府を構えている晉安王、湘東王とでは事情は少し異つてくる。中央に居ればどうしても高祖の制約を受けるようになり、都を遠ざかるにつれて、それは弱くなつてゆく。それが原因の全てではあるまいが、昭明太子の文學は正統的なものとなり、晉安王、それに（はつきりしない點はあるが）湘東王の文學は新變とよばれるものとなつてゐる。それはともかくとして、諸王を中心とする文學集團が、齊とは比較にならぬほど多く生まれた原因の最も大きなものは、自分自身が一流の文人でもあつた高祖の文學愛好にあつたと言つてよい。諸王は高祖に影響され、家臣は主君の意を迎え、いわゆる知識人達の生活は文學を中心として流れていつたようである。以下、高祖の息子の晉安王綱、湘東王繹、弟の安成王秀、建安王偉を、それぞれ中心とする文學集團について見てみよう。

三 晉安王綱の文學集團

後に昭明太子の集團にかわつて梁の文壇の中心となる晉安王集團も、天監年間はまだその搖籃期にあつた。

綱は高祖の第三子として、同腹の兄統におくれること二年、天監二年503十月に生まれた。彼の天監年間における經歷は、五年506（四歲）に晉安王に封ぜられ、八年509（七歲）に雲麾將軍 領石頭戍軍事、九年510（八歲）に宣毅將軍 南兖州刺史、十二年513（十一歲）になると宣惠將軍 丹陽尹となつて還つたが、十三年514（十二歲）には宣惠將軍 荊州刺史として江陵へ、十四年515（十三歲）には雲麾將軍 江州刺史として尋陽に遷り、十七年518（十六歲）に徴し還されて西中郎將 領石頭戍軍事となつてゐる。その間、王の藩府には、晉安王集團の二本の柱となる徐摛と庾肩吾が常に隨つており、それに中央から轉任してきた張率と陸倕が加わつて、集團の基礎づくりをしている。

徐摛（宋・元徽二年474—太寶二年561）は、天監八年に王が雲麾將軍 領石頭戍軍事となつた時に、その侍讀になつた。

梁初の文學集團（森野）

時に摛は三六歲である。侍讀になるについて次のような話が梁書・南史の本傳に記されている。

たまたま晉安王綱 出でて石頭を成る。高祖は周捨に謂いて曰く「我の爲に一人の、文學俱に長じ、兼ねて行いある者を求めよ。晉安と遊處せしめんと欲す。」捨曰く「臣の外弟の徐摛は、形質陋小にして、衣に勝えざるが若きも、此の選に堪えん。」高祖曰く「必ず仲宣の才あらん、亦た其の容貌を簡はず。」摛を以つて侍讀と爲す。この高祖の期待を裏切らず、摛は王の生涯を通じてその側に侍り忠節を盡している。

文章については、梁書本傳に「摛は幼にして學を好み、長ずるに及び遍く經史を覽る。文を屬りては好んで新變を爲し、舊體に拘わらず。」とあるように、若い頃から、後の宮體詩家元としての素質を持っていたようで、王は七歳の頃から彼のそのような影響を受けてゐるわけである。

庾肩吾（齊・永明八年490—承聖元年552?）は、徐摛よりも先に晉安王國常侍となつてゐる。時に、まだ二十歳にはなつていなかったようである。十二年に宣惠府行參軍に遷り、

王の國がえに随つて王府中郎、兼記室參軍、雲麾參軍 兼記室參軍を歴任している。

徐摛と庾肩吾とは、このようにして晉安王集團の人となつたのであるが、これからの此の集團は、どちらかといえは徐摛を中心として動いてゆくように思われる。後に王が太子となつた時、東宮に宮體詩をはやらせて高祖の喚問をうけたのも彼なら、侯景が臺城を陥して太子に迫つた時「侯公は當に禮を以つて見ゆべし、何ぞかくの如くするを得ん。」と叱りつけたのも彼である。

次に中央から加わつた張率と陸倕であるが、張率は天監八年に、つまり徐摛と同時に雲麾中記室として王に隨い、以後十年間、王府に随つて移動している。すなわち九年には宣毅諮議參軍 兼記室、十三年に宣惠諮議 領江陵令、十四年には諮議のまま、領記室 監豫章臨川郡、十七年にやつと太子僕として中央へ還つた。梁書・南史本傳には「府に在ること十年、恩禮甚だ篤し。」と記している。陸倕は十四年に晉安王長史 尋陽太守 行江州府州事として赴任してきたが、後に公事を以つて免職になつており、在

府の期間はそれほど長くはなかつたようである。

このほかには、九年に庾肩吾の兄於陵が宣毅長史 廣陵太守 行府州事として赴任しているが、公事を以つて免職となつてゐる。また十七年には「詩品」の著者鍾嶸が記室として王に侍している。彼の生年は宋の泰始四年⁴⁶⁸と推定されているから、この時五一歳、すでに「詩品」は完成しており、王の文章觀に大きな影響を與えたであらうこと想像に難くない。「文質彬彬」たる文章を理想とする昭明太子の背後に「文心雕龍」の著者劉勰があるように、「性情の吟詠」こそ文章の全てと信ずる晉安王綱の背後には鍾嶸があるわけである。皇太子時代に弟の湘東王に與えた書を見ると、そこに述べられた當時の文體に對する批判、つまり彼の文章觀は、すべて詩品序の主張と一致しており、その影響のほどがうかがわれる。

以上が天監年間における晉安王集團の様子であるが、すでに此の時期において、晉安王の文學觀、すなわち感情を直接表現することこそ文學とする考え方は、鍾嶸や徐摛の影響をうけて固まつてきていたと思われる。此の頃か、或

はもうすこし後のものかもしれないが、昭明太子の「晉安王に答うる書」を見ると、王の文章をほめあげたあとで古典の效用について説いている。これは、典故の引用を性情の吟詠を阻害するものとして斥ける晉安王に對して説得を試みたものと考えられるが、しかし効果は無かつたようである。

その後、普通四年523から中大通元年529にいたる雍州時代に、此の集團のピークの一つがおとづれる。南史庾肩吾傳には

（肩吾は）雍州にて命を被り、劉孝威、江伯搖、孔敬通、申子悅、徐防、徐摛、王囿、孔鑠、鮑至ら十人と、衆籍を抄撰し、其の果饌を豊にし、高齋學士と號す。

また梁書庾肩吾傳には、

初め太宗 藩に在るや、雅^{もと}より文章の士を好む。時に肩吾は、東海の徐摛、吳郡の陸杲、彭城の劉遵、劉孝儀、儀の弟の孝威と共に賞接さる。

とあるように、人材の層も厚くなり、文學活動も盛んに行われているようである。

梁初の文學集團（森野）

ところで此の中の劉孝儀、孝威は、すでにふれた劉孝綽の弟であり、また劉遵は孝綽の從弟である。梁書・南史劉孝綽傳には、その兄弟および從兄弟に文人の多かつたことについて、「孝綽の兄弟、及び羣從諸子姪は、當時七十人あり、並びに能く文を屬^{つづ}り、近古いまだ之れ有らざるなり」のように記されている。この劉氏兄弟に對抗しうるものに、到氏兄弟や蕭氏兄弟がある。蕭氏の兄弟は主として高祖の坐を中心として梁の中、後期の文壇に活躍するが、梁書・南史蕭子恪傳には次のように述べる。「子恪の兄弟十六人、並びに梁に仕う。文學ある者は、子恪、子質、子顯、子雲、子暉の五人。子恪は嘗つて所親に謂いて曰く『文史の事は、諸弟之を備えり。吾の復た牽率するを煩わさず。但だ退食公よりすれば、過無くして足れり。』このように同族にすぐれた文人が多く輩出した例は、高祖一族をはじめとして當時多くあつたようで、文學が生活の中心であつた此の時代の一つの特色と言えよう。これら同族文人は、見方によれば夫々一つの文學集團とみなすこともできるわけであり、梁書・南史蕭介傳にいう「介は性高簡にして、

交遊少し。惟だ族兄琛、從兄珍素および洽、從弟淑らと、文酒もて賞會するのみ。時人以つて謝氏の『烏衣の遊び』に比す。」のような、同族文人による「遊び」が、當時いろいろあつたものと思われる。

話がすこしそれたが、晉安王集團の様子について、梁書簡文帝紀には「文學の士を引納し、賞接して倦む無し。恒に篇籍を討論し、繼ぐに文章を以つてす。」と記す。中大通三年の昭明太子の薨去によつて皇太子となつた綱は、此の集團を率いて中央文壇に登場し、新風を吹きこむことになる。

四 湘東王繹の文學集團

蕭繹は天監七年508八月、高祖の第七子として生まれた。

十三年514七月に湘東王に封ぜられて寧遠將軍 會稽太守となり、普通元年520に侍中 宣威將軍 丹陽尹として都に還るまで會稽郡にとどまる。したがつて湘東王集團は、まず會稽郡の藩府でその基礎づくりがなされたわけである。

湘東王が會稽太守に任ぜられた時、高祖は三到の一人到

溉を輕車長史 行府郡事として王に隨行させた。その時、高祖は王にむかつて「到溉は、直に汝が行事たるのみに非ず。汝が師たるに足る。進止あるときは、毎に須べからく詢ね訪うべし。」と言いきかせているから、王は會稽時代を通じて到溉の指導の下にあつたものと思われる。すでに述べたように到溉は高祖をとりまく後進文人の一人であるから、その文章は「好んで新變を爲し、舊體に拘わらず」といわれる晉安王集團の徐摛などとは異り、いわゆる當時の正統派である。したがつてまだ十歳前後であつた湘東王の文章觀も、その方向に養われたものとみてよからう。

さて會稽時代の湘東王の下には、王籍、臧嚴、劉杳、顏協、顧協といった人々が集まつている。

まず王籍（齊・建元二年480—大同三年537?）は、輕車諮議參軍として王に隨つて會稽に赴くが、それまでに既に任昉にその才を認められ、また沈約の坐にも參加しており、その文才は廣く世に知られていた。彼の文章は謝靈運の體をまねる、いわゆる「謝靈運派」で、「康樂の王籍あるや、仲尼の丘明あり、老聃の嚴周あるが如し」と言われたほどで

ある。會稽郡における彼の行動については、梁書本傳に、郡境に雲門天柱山あり。籍は常に之に遊び、或は月を累^{かさ}ぬるも反らず。若邪溪に至りて詩を賦す。其の略に云う「蟬^{せみ}噪^{さわ}ぎて林^{いん}遼^{いよ}いよ靜かに、鳥鳴いて山更に幽なり。」當時もつて文外の獨絶と爲す。

とあり、南史本傳によると、この詩をみた劉琨は「節を撃ちて已む能わず」という状態であつたという。

臧嚴（？—大同八年542？）は湘東王の侍讀から宣惠輕車府參軍兼記室となつた人である。その文章は「富麗」と稱され、任昉の賞讃もうけているが、その性格は、梁書・南史本傳に「性は孤介にして、人間において未だ嘗つて造請せず。僕射徐勉之を識らんと欲するも、嚴は終に詣^つらず。」というように、いささか變つていた。

顏協（齊・永泰元年498—大同五年539）と顧協（宋・泰始六年470—大同八年542）は、後に湘東王府の「二協」と稱されるようになるが、この頃は、顏協は王國常侍兼記室、顧協は輕車參軍兼記室であり、また劉杳（齊・永明五年487—大同二年536）は宣惠記室參軍であつた。

梁初の文學集團（森野）

その後、王籍は荊州刺史となつた（普通七年526—大同五年539）王に隨つてその地で歿し、劉杳は徵されて東宮に侍し、顧協は王の推薦によつて中央に還るが、顏協と臧嚴とは、その生涯を湘東王府で過している。

梁初の湘東王集團の様子は、だいたい以上のものであるが梁書・南史元帝紀には、その後の様子について、「世祖は、性聲色を好まず、頗る高名あり。裴子野、劉顯、蕭子雲、張纘および當時の才秀と布衣の交りを爲す。」と記している。この中、裴子野（宋・泰始三年467—大通二年528）、劉顯（齊・建元三年481—大同九年543）、張纘（齊・永元元年499—太清三年549）といった面々は、いわゆる「古體派」のグループである。古體派とは「典にして速、麗靡の詞を尙ばず。其の制作は、多く古に法いて、今の文體と異なる」（梁書・南史裴子野傳）というもので、裴子野を宗とする一派である。後に太子綱は、「湘東王に與うる書」の中で裴子野の文體を評して「乃わち是れ良史の才にして、了^{また}く篇什の美なし」といつているが、當時かなり重んじられていたようで、裴子野傳には「當時、或は詆^{そし}り訶^{とが}むる者あるも、その末に及

びて、皆翕然として之を重んず」と、その様子が記されている。

湘東王の文章觀が簡文帝のそれと異なることは、この古體派に對する態度によつてもよくわかるが、隋書文學傳序には、梁の大同以後の「典則に乖^{そむ}き、新巧に馳^はせる」文章は、簡文帝と湘東王が「その淫放を啓^{ひら}いた」ものと論じている。しかし、年少のころは到^{いた}溉^{がい}に教育をうけ、後に古體派の文人と交り、さらに昭明太子、晉安王綱の影響をもうけた湘東王は、獨自の文章觀を持つていなかった、持てなかつた、というところが本當ではあるまいか。

このような高祖の諸子を中心とする集團に比べて、次に述べる高祖の弟、安成王秀、建安王偉の集團は、さらに自由な、のびのびした雰圍氣を持つていたようである。二人とも兄の高祖とは仲が良く、すべての面において制約されることが少なかったからであらう。そこには何遜、吳均といった清新な趣きを持つ個性的な文人が育っている。

五 安成王秀の文學集團

安成王秀（宋・元徽二年⁴⁷⁴—天監十七年⁵¹⁸）は文帝の第七子、高祖の腹ちがいの弟である。南史本傳には「建安、安成の二王は、尤も人物を好む。世、二安の士を重んずるを以つて、之を四豪に方^かぶ。」のように、その集團づくりに力をいれていたことを述べている。

秀は天監元年二九歳の時に安成郡王に封ぜられ、二年には石頭戍軍事を領し、六年に江州刺史、七年に荊州刺史となり、十一年に復び石頭戍軍事を領し、十三年に郢州刺史、十六年に雍州刺史となり、十七年に四四歳で薨じている。

王の集團に参加した文人には、周興嗣、王籍、臧嚴、庾仲容（宋・昇明元年⁴⁷⁸—大寶二年⁵⁵¹）、謝微（齊・永元二年⁵⁰⁰—大同二年⁵³⁶）何遜、劉峻という人々がある。

まず天監の初には、中央文壇に出るまえの周興嗣が王國侍郎として、また後に湘東王集團の主要メンバーとなる王籍が主簿、臧嚴が侍郎ついで常侍として仕え、七年頃から庾仲容が主簿として、高祖に疎んぜられて都落ちしてきた戸曹參軍の劉峻とともに仕えている。梁書庾仲容傳には「並びに彌學を以つて王の禮接する所となる」という。十

三年頃には、後に裴子野や劉顥とともに中央で活躍する謝徽が安成王法曹として、また建安王集團の人であつた何遜が參軍事として王に隨つてゐる。

このほかに中央から、王僧孺、陸倕、劉孝綽、裴子野といった名のある文人達が轉動して來てゐる。すなわち裴子野は天監三年ころ右軍參軍として、陸倕もこのころ右軍外兵參軍さらに主簿として、劉孝綽は六年に記室として、王僧孺は十三年に參軍として此の集團に加わつてゐる。梁書・南史の安成王傳には此の四人について次のような話をのせてゐる。すなわち安成王の薨去後、

故吏の夏侯竄ら、墓碑を立てんことを表するに、詔してこれを許す。當世の高才の、王の門に遊ぶ者、東海の王僧孺、吳郡の陸倕、彭城の劉孝綽、河東の裴子野は、各々その文を製す。之を擇び用いんと欲するに、咸な實錄と稱すれば、遂に四碑並びに建つ。

これらの人々は、王府に奉職してゐる時だけでなく、折にふれ、招きに應じて王の集團に参加してゐたようである。これはただ此の四人と安成王集團の間だけに限つたことで

梁初の文學集團（森野）

はなく、諸王は名のある文人を招き、文人たちも諸王の門に遊んで詩文を楽しんだものであらう。ただ、何かと氣づかれのする高祖の諸子よりも、年もとつていて氣樂につき合える安成王、建安王らの集團に好んで出入りし、そこにのびのびとした文學の遊びをくりひろげたであらうことが想像される。

六 建安王偉の文學集團

建安王偉（宋・元徽三年475—中大通五年533）は、文帝の第八子、安成王と同じく高祖の腹ちがいの弟である。天監元年、二八歳の時に建安王に封ぜられ、四年に南徐州刺史、五年に丹陽尹、六年に揚州刺史、九年には石頭戍軍事に遷り、その年、江州刺史となつた。十三年には左光祿大夫となり、十七年には建安郡の土地が瘠せているということで南平郡王に改封され、侍中 左光祿太夫 開府儀同三司となつてゐる。

梁書・南史本傳には、人物を好んだ彼について「賢おもに趣もき士を重んずること、常に及ばざるが如し。是に由りて四

方の遊士、當世の知名者、畢く至らざる莫し。」のようにいう。このようにして王府に集つて來た文人たちは、梁の藩邸の中で最もすばらしいといわれる芳林苑の第を舞臺に、文學の遊びを展開することになる。その第というのは、齊のころに青溪宮を芳林苑と改めたもので、天監の初に偉に賜つたものである。偉はこれに手を加えて更に華麗なものとした。南史本傳にはその様子を、

また穿築を加え、果木を珍奇にし、雕靡を窮極むること、造化に倖しきあり。遊客省を立つるや、寒暑宜しきを得、冬には籠爐あり、夏には飲扇を設け、毎に賓客と其の中に遊ぶ。從事中郎蕭子範に命じて之が記を爲らしむ。梁の藩邸の盛、これに過ぐるなし。

という。

この集團に参加した人としては、まず何遜（？—天監十七年518?）をあげることができる。何遜は二十歳のころ文章を通じて長老の一人范雲と忘年の交りを結び、以後、范雲は遜の一文一詠に嗟賞の言を發し、その文を評して、「このころ文人を観るに、質なるは則ち儒に過ぎ、麗なるは則

ち俗に傷る。其の能く清濁を含み、今古に中なるは、之を何生に見る。」と言つてゐる。また沈約も彼の文を愛し「吾れ毎に卿が詩を讀むに、一日三復するも、猶お已む能わず。」と遜に語つてゐる。當時、彼の詩はこのように名流に稱されていたのである。天監の初に建安王の水曹行參軍兼記室となり、九年には江州刺史になつた王に隨つて、やはり書記のことを掌つてゐる。その後、王の推薦によつて、吳均とともに高祖の坐に侍ることになり、初めこそ愛接されたが、次第に疎んぜられ、高祖に「吳均は均ならず、何遜は遜ならず。未だ吾れに朱异あるに若かず。信に則ち異れり。」と言われるようになり、坐に召されることも無くなつてしまつた。十三年ころ地方に下つて安成王に仕え、ついで廬陵王の記室となつて卒した。建安王偉は彼の死を聞かや、其の柩を迎えて殯し、妻子に米を給付したという。劉孝綽と、世に「何・劉」と並び稱され、「詩多くして能きものは沈約、少くして能きものは謝朓、何遜」と湘東王に評された何遜ではあつたが、高祖の坐においては華を咲かせることはできなかった。

何遜とともに建安王に仕えた人に吳均（宋・泰始四年468—

普通元年520）がある。均の文章は「清拔にして古氣あり」と

稱され、その文體をまねる者もあつて、世に「吳均體」と

言われていた。建安王が天監六年に揚州刺史になつた時、

招かれて記室を兼ねて文翰を掌り、九年に王が江州刺史に

遷ると、補國侍郎として府城局を兼ねた。したがつてその

頃、吳均はずつと何遜と一緒だつたようである。その後、

多分何遜と同時に推薦されたものと思うが、高祖の坐に侍

り、最初はそれでも調子はよかつたのであるが、都の風に

なじめず、結局何遜と同様に疎隔され、その後も不調のま

ま五二歳で世を去つた。

このほか梁書・南史何遜傳によれば、孔翁歸という詩に巧みな人物が、このころ記室として王に仕えていたようである。

以上述べた諸王の集團では、中央文壇とは異り、文人達
は皆のびのびと文學を楽しんでいたようである。それぞれ
の諸王の集團は、中央へ雄飛せんとする若手の文人、都落

梁初の文學集團（蘇野）

ちをして再度の中央入りを計る者、或はそこに失意の身を
落ちつけようとする者、また己の生涯を王に賭けて忠勤を
勵む者等々、さまざまな人物によつて構成されていた。し
たがつて集團の主にとり入るための競り合いは、中央文壇
ほど激しくはなかつたようである。王にとり入ることが出
世の手段の全てではなかつたからであらう。そのようなわ
けで、主人の好みに合わせて文章を作る必要もなく、自己
の文思の趣くままにすることができたであらうから、そこ
に個性ある文學の生まれる可能性は大きかつた。そういう
動きが集團としてまとまり盛り上がつてきたのが、徐摛、
庾肩吾さらに鍾嶸を中心として、後に宮體詩を生み出す母
胎となつた晉安王集團であらう。中央から干渉されること
の少ない地方で、のびのびと養ひ蓄えられたエネルギーがあ
つたからこそ、中央において舊體を一變し、新しい文學の
方向づけをすることができたのである。もし蕭綱が地方に
下らず、徐摛、庾肩吾、鍾嶸らが中央にとどまつていたな
ら、梁の文學はまた別の途をたどつていたに違いない。

以上が、梁初天監年間を中心とした文學集團のたいいの様子であるが、このままの状態で普通（520—526）、大通（527—528）と経過し、中大通三年531に昭明太子が三一歳の若さで薨去すると、梁の文壇は大きく變化する。すなわち皇太子となつた晉安王綱が徐摛、庾肩吾を中心とする文學集團を率いて中央入りし、雍州の藩府で練りあげた「性情の吟詠」にもとづく艷體の詩を世にひろめるようになる。後世の人々は此の時期を以つて文學史上の一區切りとしており、

例えば隋書文學傳序には、齊の永明および梁の天監の文學を一まとめにして「清綺」を尊ぶものとし、梁の大同以後の文學は「典則に乖^{そむ}き、新巧に馳せる」もので、簡文帝と湘東王が「其の淫放を啓^{ひら}いた」と言つてゐる。湘東王を簡文帝と同じように扱つてよいものかどうか、よくわからないが、要するに梁初天監の文學は、まだ齊の永明文學の延長であり、眞に梁らしい文學は、晉安王が皇太子になつてから展開されるのである。